

Heroldo de HEL

N-ro 121

Novembro 2008

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟

de HOŠIDA Acusi

〒053-0844 苫小牧市

Miyanomori 2-18-18, TOMAKOMAI

宮の森町2丁目18-18

053-0844 JAPANIO

星田 淳 方

TEL-FAKS:0144-74-2539

Retadreso:hosidaacusi@kir.biglobe.ne.jp

Postgirkonto (郵便振替) : 02700-6-17075

*Sekretario: KAWAI Yuka

*事務局: 川合由香

N-ro 45, Simin-Katudō-Sapōto-Sentā

〒060-0808 札幌市北区

Sapporo L-Plaza 2F, Kita 8 Nisi 3

北8条西3丁目札幌エルプラザ

Kita-ku, Sapporo, 060-0808 Japanio

市民活動サポートセンター レターケースNo.45

TEL-FAKS : 0126-62-4636

Retadreso : nordano@sea.plala.or.jp

*TTT-ejo : <http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/jp/index-j.htm>

[Enhavo/目次]

- 表紙、Enhavo/目次 P. 1
- La 72a Hokkajda Kongreso de Esperanto P. 2
第72回北海道大会 (報告) / La Red.
- Prelego memore al la parlamenta Rezolucio
[国際言語年・「アイヌは先住民」国会決議記念講演会]
- La Ĝenerala Kunveno de HEL [北海道エスペラント連盟総会] P. 3
- Nia kongresa memorajo/(Verko de I.U. en 1932)donas historian
fakton, kvankam korektendan/大会記念品「日本エスペラント学
事始」の中の歴史的事実の吟味/HOŠIDA Acusi
- Partopreninte en la 5a datreveno de Sapporo-El-Plaza P. 5
札幌エルプラザ誕生5周年祭に出展して/研究教育部 川合由香
- Rekomendo de voĉlego 音読のススメ P. 6
KABAYAMA Yuusuke 樺山 裕介
- Danke ricevitaj -受領郵便物- (星田淳 扱い) P.10
- Raporto pri mia travivaĵo rilate al la 93a UK en Roterdamo (2) P.11
ロッテルダムUK報告(2) TSUBAKI, Shouichi
- Epopeo "Poemo de Utnoa" P.13
叙事詩「ノアの方舟の詩」の紹介/後藤義治
- [第1回委員会報告] Protokolo de la 1-a Komitato Kunsido
- [編集後記/Redaktanto parolas ...] P.18

La 72a Hokkajda Kongreso de Esperanto 第72回北海道大会 (報告)

La Red.

La 72a Hokkajda Kongreso de Esperanto okazis dum la 13a -- 14a/sept., 2008 en la Trejna Centro de Hokkajda Relvojo. Memore al la parlamenta rezolucio agnoski ainan genton indiĝena en Japanio, en la unua tago okazis prelego de S-ro NOMOTO Hisae, estro de Aina Pen-Klubo, pri aina kulturo, tradicio kaj lingvo.

第72回北海道エスペラント大会は、9月13日と14日、札幌市東区のJR社員研修センターで開催された。参加者23人（不在参加者3人、一般聴講者5人を含む）。13日は13時30分から国際言語年とアイヌ民族先住民決議を記念してアイヌ語ペンクラブ会長・野本久栄氏のアイヌ文化についての講演。終了後近くの台風厨房札幌アリオ店へ移って17時ごろから Bankedo。14日は9時半から研修センターで北海道エスペラント連盟総会。終了後、午後から新年度第1回の委員会を開いた。

Prelego memore al la parlamenta Rezolucio

agnoski ainan genton indiĝena en Japanio,

[国際言語年・「アイヌは先住民」国会決議記念講演会]

日時、場所：9月13日13時30分～16時、JR研修センターにて

講師：アイヌ語ペンクラブ会長 野本久栄さん

司会者（横山広報部長）の紹介に続き、星田委員長が「エスペラント運動と先住民の文化・言語の尊重」についてプラハ宣言を引用して解説し、野本講師の講演に移った。

講演要旨：1951年白老で和人とアイヌの両親の子として生まれ、アイヌとしての自覚・関心はなかったが35才から民族の問題にかかわるようになった。

それまでの私と同じように、「私はアイヌだ」と名乗る人は少ない状態は今も変わらないが、誰かがやらねばならぬこと、と思ってアイヌの文化・伝統、儀式などを教え、アイヌタイムズを発行している。

鮭を捕り料理する儀式に「残酷だ」と言われたが、人間誰でもほかの生き物の「命をいただいて」生きていることを自覚する意味がある。だからその「命をくださる自然」を大事にせねばならぬ。天から下りてきたものに何一つ無駄はない。

アイヌ語地名はどんどん消えているが、和訳されて残っているものもある。ひ

と口で言えばアイヌ文化とは「生活に必要なものは自分で作って使う」文化だったと思う。その道具を作るのは男の役目だった。

La Ĝenerala Kunveno de HEL [北海道エスペラント連盟総会]

日時：2008年 9月14日（日）13:07 ~16:??

場所：北海道旅客鉄道株式会社社員研修センター301号室

出席者：阿部映子、小淵修子、樺山祐介、川合由香、後藤義治、佐藤英治、末永章子、須藤昭三、椿正一、星田 淳（記録）、山下博子、横山裕之、渡辺康子

議事：

*地方会、個人の活動報告、自己紹介

札幌（SES）切替会長宅に不幸あり、SES ニュースが出ず、後藤さんが発行を代行する。SESの土曜会について、以前は参加する時胸が躍ったが、今はその雰囲気失われた。ときびしい批判があった。楽しい会合を作ろう。

連盟ホームページ（横山）：1998年から十年、5万件以上のアクセスがあった。行事の予告、報告も出せるので記事を出してほしい。

*役員改選

星田委員長から在任20年は長すぎる、交代してほしい、と椿委員を推薦したが、椿委員は「持病があり不安、引き受けられない」と固辞、現状維持となる。須藤委員が委員辞任を表明、了承された（室蘭地区委員は欠員となる）。

（役員名簿、役務分担は第1回委員会を参照）

*来年度大会

現状を見ると、やはり集まりやすいのは札幌なので2009年9月または10月、札幌で開く、と予定する。

Nia kongresa memorajo

(Verko de I.U. en 1932) donas historian fakton, kvankam korektendan

大会記念品「日本エスペラント学事始」の中の歴史的事実の吟味

HOSIDA Acusi

Ĉi-jara kongresa memorajo "Komenco de Esperanta Studo en Japanio" de bone konata pioniro I.U. Ĝi prezentas multajn interesajn faktojn kaj ideojn, tamen troviĝas ankaŭ korektendoj, ĉar li estis tiam subtera movadanto de tiam ilegala kaj persekutata komunista partio.

今年の大会記念品は歴史的文獻です。HEL成立の1932年、今再評価され

ている「蟹工船」の時代、当時の左翼エスペランチストのトップ論客だった”IU”が縦横に語った歴史的文献（ひと時期”幻の名著”）に伊東三郎、小田切秀雄らの文や解説を加えて1977年復刻したものです。

II, 伊東三郎など多くの plumnomo のあるこの人、最後の戸籍名は宮崎巖でしたが、1932年当時は非合法の共産党幹部で警察の監視を潜っての地下活動の日々を送っていました。だからこの本も本人の「著書」ではなく、「武藤丸楠編・伊井迂氏（＝伊東三郎）談論集」となっています。聞き書きですから、歴史的事実としては吟味すべきところもあるでしょう。一つ見つけたので以下、ちょっと書きます。100頁に次の文があります。

＞ 柏木ロンドは1930年東京での日本エスペラント大会の本会議で獄中の共産党被告にエスペラント書籍差し入れの件を提議し満場一致可決せしめた。

ところがほかの資料では1930年の日本大会は金沢で開かれ、東京で開かれたのは1929年とある。日本のエスペランチストに関するデータを調べている千葉大学の柴田巖さんに問い合わせた次のことがわかりました。

＞ 解放運動犠牲者に対するエスペラント書の差し入れが協議されたのは、
＞ 1929年9月東京で開かれた第17回日本エスペラント大会においてでした。
＞ この点に関する限り、『事始』の記述は不確かと言わざるを得ません。
＞ R01929年10月号に掲載された「第17回日本エスペラント大会の記」
＞ には、こうあります。

＞ 第二提案はKarcero で苦しんでゐる人々でエス語を習ひたいといつて
＞ 手紙をよこされる人々があるのでそれらのsuferantojのためmonkolektoを
＞ してエス語書籍のさし入れをなす事についての提案で泉茂雄氏の
＞ 提案説明あり。清見陸郎氏の補足説明の後二三他の人からの質問応答が
＞ くりかへされた後小坂氏よりこれは性質上大会協議会の決議として
＞ でなくむしろ名より実をとる意味で大会参加者はこの美挙に賛して
＞ この際応分のmonoferiをなす事としてはとの提案ありて満場の賛成により
＞ その意味に於て参加者が応分のmonoferiをなすこととして次の議題に移る。

「Karcero で苦しんでゐる人々」には共産党被告も多かったでしょうから、実態は『事始』の記述に近かったでしょうが、歴史的事実は確認が必要です。

私が IU に魅せられたのは、彼の詩によってでした。日本のエスペラント原作詩人で彼を超える人がその後出たでしょうか？ 「声を出して読みたいエスペラントの詩」が彼の作品にはたくさんあります。来年は彼の没後40年。彼は死の半年前、1968年8月の日本エスペラント大会（札幌）に出席、「人権擁護の運動にエスペラントを使おう」などを提案し、詩”Mateno en Sapporo”を我々に残してくれました。

Saporo-El-Plaza, la institucio, kies servon ni(HEL) kaj multaj aliaj civilaj organizoj ĝuas, havis 5-jaran datrevenon. Ĉe tiu okazo ĝi planis feston, kie la membro-organizoj havu okazon montri siajn agadojn kaj varbi novajn aliĝantojn. Ni partoprenis kaj trovis novajn interesatojn. (La red.)

9月20日(土)、HELが活動拠点として利用している札幌エルプラザの、誕生5周年祭が行われた。ここを活動に利用している諸団体が、自分たちの日頃の活動の成果を発表し、市民への啓発に努めたり、新人を勧誘するためのお祭りである。ちょうど委員会を開いているとき、エルプラザの担当職員に誘われ、よい機会だとHELも出展することにした。

HELが借りた部屋では、エスペラントの説明や海外行事の写真を壁に貼り、出入り自由のなかを五月雨式にやってくる来訪者に対して、待機しているHEL-anoが解説した。「はじめての国際共通語エスペラント講座」と銘打って、興味を持ってくれた方には、小冊子『橋渡しの言葉エスペラント』または沼津エスペラント会発行の「国際語エスペラント～3分間でわかるパンフレット講座」を用いて、ささやかな入門教授をした。

「ご自由にお持ちください」コーナーには、阿部映子氏が「La Revuo Orienta」や「Esperanto」のバックナンバーを大量に提供してくださった。このコーナーにはそのほかに沼津エス会の「国際語エスペラント」のパンフ3種(講習にも使った「3分間でわかる～」と、エスペラントそのものの解説、それから振り仮名付きの小中学生向けのもの)、エスペラントで発信されたアイヌ民族に関する雑誌記事のコピー(筆者は外国人エスペランチスト)、プラハ宣言のパンフその他を置いた。

入り口や室内の壁には、ザメンホフの大きな写真が載った「少年写真新聞」、星田淳氏ご提供のエスを紹介するマンガ、世界大会の写真などを掲示した。

入り口から顔だけ突っ込んですぐ姿を消してしまう人が一番多かったが、室内に足を踏み入れて展示を見たり、資料を持ち帰ってくれた人も約30名いた。数分間以上足を止めたり、何か質問をしてくれる人には、以下に示す簡単なアンケート

をお願いした。そのうち、今後のHEL からの連絡を希望するといって連絡先を記入してくれた人が5 人いた。

椅子に座っての体験講座を受けてくれたのは4 名で、講師を務めたのは星田氏のほか、樺山裕介氏、後藤義治氏と川合であった。うち1 名は事前に川合に問合せの電話を入れ、当日も昼休み以外は熱心に星田氏の手ほどきで『橋渡しのことば エスペラント』を読み進めておられた。

若い連盟員を新たに迎えることが喫緊の課題であるHEL にとって、今回体験講座を受講してくれた4 名のうち2 名が30代であったことは心強い。新人を迎える側の心の準備と教える技術の工夫が急ぎ必要である。

< 来訪者へのアンケート結果 (回収: 6 部) >

1) 職業・年齢

高校講師 (62歳)、無職 (31歳、63歳、69歳)、パート (32歳、50歳)

2) E についてどのくらい事前に知っていたか

存在だけは知っていた (3 名)、昔はあったが今は廃れたと思っていた (1 名)、
いままも実用されている国際共通語だと知っていた (2 名)

3) このイベントで、E についてどんな印象をもったか (複数回答可)

規則的でわかりやすそうだ (2 名)、単語の作り方が面白い (1 名)

その他 (自由記入) : 面白い世界が開けると思う / 世界共通というのがとても興味深く、言語自体もそんなに難しくはなさそうという印象だ

4) E は国際語として役に立つと思うか

草の根の国際交流には役に立つ (2 名)、多くの人の仕事や趣味に役立つ (1 名)、役に立たない (0 名)

その他 (自由記入) : どういう形では分からないが、世界平和の役に立つように思う / 英語ではなく世界の主流がE になったらいいと思う

5) 以後、HEL からの案内を希望するか

(5 名が連絡先を書いてくれた)

Rekomendo de voĉlego 音読のススメ

KABAYAMA Yuusuke 樺山 裕介

Nia diligenta kolego KABAYAMA akcentas la signifon de voĉlegado. Oni povas mastri lingvon ne per cerbo, nek okuloj, sed per buŝa praktikado,

「エスペラントの共同体は、その構成員が例外なく二つ以上の言語を話すという、世界的規模の言語共同体としては数少ない例の一つである。構成員はそれぞれ少なくとも一つの非母語（ここではエスペラントのこと）を会話のできる程度まで学ぶことを自己に課している。」プラハ宣言の一節です。

5月合宿の講師、藤本達生さんが強調したことは、会話力をつけるためには音読が大事であることでした。そのとおりです。

口を動かさしないで、しゃべれるようになりたいなんて、腹筋運動をしないでダイエットしたいと言うようなものです。私は薬屋で働いていましたが、ダイエット食品だけで痩せた例を知りません。音読は、相撲の四股のようなものです。スポーツ選手が走り込むようなものです。基本です。いくら目で読めても、しゃべれるようになれるわけがありません。

私の失敗例を書きましょう。横浜の世界大会が始まる前、分厚い推理小説にはまってしまい、少しの音読さえもせず、さぼってしまいました。そこそこのエス歴があるから大丈夫だと、なめてました。本番、思ったよりも受け答えができなくなっていました。これではいかんと、会場の廊下で、尊敬する知人の論文を音読しました。この慣らし運転のおかげで、それからは口が思うように動くようになり、会話を楽しむことができました。

ある語学の達人の本で読んだ例です。インドネシア語は習得の易しいことばだったので、発音練習をしないで、現地へ行った。そうしたら、頭では解っているはずなのに、会話ができなかったというのです。

エスペラントには、聖徳太子ならぬザメンホフが定めた、不可侵なる十六条憲法があります。憲法第9条は、「発音は書かれた通りになされる」ということです。視覚媒体と聴覚媒体の完全一致、聴く人に誤解の余地のない原則堅持こそが、そうありがたい誠実なコミュニケーションであります。つまりは正確にきれいに発音することです。後述しますが、これはいろいろ学習の役にもたちます。

ただし、まだきれいに発音できないからといって、会話をしないのは、いけません。また、完成をあきらめていない発展途上の人々のせいっぱいの声を、発展しなかった人は誠実に受け止める義務があります。居直って傲慢にならず、怖じけて卑屈にもならないことが双方に求められます。なにより優先されるのは、とにかくまず意志疎通をし、そして、できればもっとより良い、公正で実りのある意志疎通を次に作るんだという向上心です。

正確できれいな発音をするには。まず、母音AEIOU から。特に大事なのはU です。ウよりもいっそう口をすぼめます。U の後にもうひとつU をつけるくらいでちょうどいいです。でないと、すぐ紛れてしまいます。

次に大事なのはI です。イよりももう一步、横に広げて発音しましょう。

O もO に聞こえるくらい意識して唇を前に出します。

A も練習のときは意識して縦に広げるといいです。

子音で大切なのはN です。これは舌先を必ず上の歯の裏につけなければいけません。目的格のN はあるなしで全く意味が違ってしまう大事なところですよ。ここで、舌を歯に付けない「ng」になってしまいがちですが、一回一回付けましょう。

子音で日本人（そして、おそらく多くのアジア人）が苦手なのは、重なった子音と、L とR です。「ekstremo」なんてkstrと、なんと四重子音です。実は、先行した人工語ヴォラピュクでは、そこをちゃんと考えていて、多重子音とR を無くしたんですね。でもこうなったら仕方がない。子音から子音へ移るスピードをできるだけ速くしてよけいな母音ができるだけ入らないようにしましょう。その分、母音の発音は長くしっかりやって、はっきりした差をつけるように、くりかえし練習しましょう。

「エクストレーモ」なんて発音してはいけません。「ekusutoremo」になってしまいます。憲法違反です。これは「エEkst レエエモオ」と発音するのです。L とR については、R よりもL の方が大事です。舌を歯の裏につければL、それ以外はすべて（たとえ巻き舌にならなくても）R だからです。もっとはっきりさせるには、「あぶらあげ」を繰り返す言うことで、Rの巻き舌発音が、意外に簡単に身につきます。

発音の前に、おおあくびをしたり、顎を前後左右に動かして、口角をほぐしておきます。さあ、読んでみましょう。

Karlo tre amis sian fratineton, sed ne kuraĝis ludi kun ŝi

カアアrlo オ trエエ アアミス スィイイアン fra アティイネエトオン、
セEd ネエ クウウraアアアヂイス luウウディイ クウン シイイ

くどいですか？ しかし5 をやるのに練習で10やらないと、本番で1 も出ません。母音は必要とあらばいくら長く発音してもかまわないのです。後ろから2 番目の音節は、さらに、も一と長くすればいいのです。子音は子音で正確に、そして多重子音は瞬時に近いくらい短くなくてはいけないのです。子音は子音、母音は母音、さらに憲法10条「アクセントは後ろから2 番目」であることを、崩さないことが最優先です。

速く読むのはそれができてからです。速くきれいに読めるのは、これができているからです。これができれば、もう緩急自在です。

実際、はじめは、舌や歯や唇やあごが、口のなかと顔面の下半分で、すったもんだでたいへんです。しかし、くりかえしていくうちに、舌や歯や唇やあごが、なすべき仕事を覚えてくれます。こうなると、文字を見れば、その通りに動いてくれるようになります。発音することが楽しくなってきます。怖じていた会話に対しても、何かははじけ飛びます。

単語が楽に覚えられます。目だけではなく、口が覚えるからです。口が思いだしてくれます。L か R か、もう迷ったりしません。Akurate を Akrate だと間違ったり書いたりしません。Sprito と Spirito を、ごっちゃになんかしません。

自分が発した声は、自分の耳に響きます。これは、自然に、聴き取りの練習になっています。歌うことも楽しくなってきます。ザメンホフ以来の詩や散文の美しさを味わうことができます。リズムに合わせて踊る舌と耳の喜びです。

つまり、「話す・聴く・書く・読む」全てを完成させるのです。全てに必要なのです。全てへの近道なのです。

さあ、口を動かしましょう。黙読を禁止しましょう。エスペラントの集まりに出て一言もエスペラントを口にしないなんて、エスペラントファン倶楽部にさえもなりません。ちょっと勇気がいるのはお互い様。はずしてナンボ。あらゆる機会を利用しましょう。別の人を読んでいる番でも、口パクで自分も読みましょう。それをしないと、あまりにももったいないです。これをやっているおかげで、ロシア語教室でもアイヌ語教室でも、私が最も滑舌の良い生徒でした。

時間がない人には、せめて「1日3分の音読」を強くお勧めします。私は旅の間でもやりました。

名指します。大本のみなさん。使命感はあるのに、努力しているのに、伸び悩んでいますね。でも、あなたがたがエスペラントを勇気を持って口から発したのを聞いたことがありません。目よりも口を動かしていただきたい！ 道はそこにしかありません。これは、あなたたちへの手紙でもあります。

えらそうに書きましたが、HさんSさんKさんBさんFさんOさんその他いろいろな人が言ったり書いたりしてきたことが元になっています。それを踏まえたうえでの私の経験です。エスペラントに興味を持ってやってくる数少ない人たちが、はっきりさせないためにも、殻を破ってもらう一助になればと、キーボードを打ちました。

Prononcu, prononcu kaj prononcu! Legu kun voĉo!

*NOVA VOJO : N-ro 443 aŭgusto-septembro 2008, EPA (エスペラント普及会)、A5 X34頁中E文7頁。会員名簿に北海道から留目昌子、谷口岩雄、佐藤英治。2頁から18頁までの記事は93回世界大会(ロッテルダム)関連のもの。

*Mejlstono: 2008 septembro N-ro 209, 仙台E会: B5X20頁中E文は世界大会、アフリカの同志来訪関係3頁と引用文若干。運動の歴史を振り返る記事がよく出ているがこの号には「エスペラントで天国に送られた魂 —萱場真(後藤齊)」。資料の発掘・整理はていねいでよくまとまっている。

*La Movado;KLEG(関西エスペラント連盟)発行、N-ro 691 septembro 2008, B5X16頁のうちE文4頁。

Kajero Libervola は韓国の Tago de Pioniro, 次の頁には Lee Chong-Yeong さんの思い出、と韓国関係。Rakonto de Genĝi (源氏物語 laŭ Tacuo Hugi-moto) はこの号で5回目。「HEIWA の鐘」のエスペラント訳と——(牧野三男) は昨年横浜UKでこの歌が発表される迄の筆者と星田との協力、など。日本大会(和歌山)直前記事にも、この歌について出ている。

*Ponteto/ (Bulteno de Esperanto-Ligo en Regiono Kantoo: 関東エスペラント連盟)/ Septembro 2008 N-ro 229; B5 X16頁, 日本語。「エスペラント国紀行第93回 — 世界大会(佐々

木照央)」、「アフリカのベナンでのエスペラント指導者大会(堀泰雄)」いずれも充実した内容。

*ESKALO 第128号(2008年第4号)、2008年9月24日、川崎E会、B5X8頁(日本語)に第27回日韓中青年セミナー(LA 27A KOMUNA SEMINARIO EN JOKOHAMO)の日、E文各1頁の案内の折り込みつき。エスペラントの旅は「安・珍・新」—安い、安心、珍しい、新鮮! の巻頭見出しでハンガリーでのIJK(国際青年エスペラント大会)やロッテルダムUKの報告、白田玲子のハノイ日記。

*受講生通信 第120号, 2008-10-01, 沼津エスペラント会, B5X12頁の内E文2頁強。第9回中四国エスペラント大会(11月1-2日)の案内同封。

*La Movado;KLEG発行、N-ro 692 oktobro 2008, B5X16頁のうちE文4頁。ロッテルダムUKの報告、分野別用語集 NUN-vortojの紹介など。歌の楽譜、このごろよく出る。Jen nia rondo は関西大会、日本大会などに出場している合唱団 Heliko. 書評に Interpopola konduto(Edmond Privat)と Sayonara, Japanio!(Davor Klobčar の横浜UK参加記)

*NOVA VOJO:N-ro 444 oktobro 2008, EPA、A5 X34頁中E文5頁。93 UK(ロッテルダム)参加記、韓国圓佛教、バハイ教との宗教交流記事など

*Novajoj Tamtamas: N-ro 231/okto-

bro 2008, JER(Jokohama Esperanto-Rondo)発行、A4X4頁、全文E. 9月から
の aŭtunaj agadoj について。夏の体
験発表、観月会、デザインフェアへの
参加など。

*La Tamtamo: 第403号, 2008年10月
号, A4X 8 頁, JER, 日本文。Novajoj

Tamas の記事の日本語版もある。「ハ
マロンド40周年に見る機関誌・会報の
歴史(2)」は1980~1995年分。

*La Movado; KLEG 発行、N-ro 693
novembro 2008, B5X16 頁のうちE. 文4
頁。北海道大会報告と「札幌で展示と
体験講座開催」の記事あり。

Raporto pri mia travivaĵo rilate al la 93a UK en Roterdamo (2)

ロッテルダムUK報告(2)

TSUBAKI, Shouichi

会場に入ると、UK常連の日本人、外国人のなじみの顔が見えてくる ——。

Mi eniris en la kongreresjon iomete post ĝia malfermiĝo(la 9an atm. de sabato), sed jam troviĝis multaj homoj en la salono.

Mi kredis, ke mi jam bone scias, kion mi unue faru. Oni kutime devus tuj ĝiĉeti antaŭ ĉio. Spite tion miaj okuloj, vole aŭ nevole, jam ekserĉis konatojn, precipe, japanojn. Devus esti multaj japanoj laŭ la sufiĉe granda nombro de aliĝintoj, kiujn mi multfoje konsultis sur-rete hejme. Supozeble mi estas tro frua, ĉu ne?

Sed post mia akceptiĝo ankoraŭ iom longe daŭris tia stato ĝis kiam mi fin-fine troviĝis inter kelkaj japanaj konatoj. Interalie, s-ron K, 'mia jam kutima UK-kunvojaĝanto preskaŭ ĉiam portantan lian japan-stilan ventumilon', mi revidis sidantan ĉe iu el kelkaj tabloj, kiuj staris sur la planko de la salono. Kaj mia alia gaja konato, s-ro A jam estis preparanta por aliaj kongresanoj fotilon kaj grandegan mapon, kiu plej-verŝajne montras, de kie li venas. Apud ni sidis iu alilanda sinjorino, kiu okupiĝis pri afiŝo-paper-desegnado por la movada foiro en ĉi-vespera programero. Mi proponis al ŝi mian helpon pri ŝia laboro, kvankam mi ŝin ne konas sed tamen ŝajne ie vidis, sed ŝi tamen afable rezignis mian proponon. Dume kelkaj personoj venis al ni por demandi ion-tion koncerne de kongresaj aferoj. Ŝajnas, ke ni, kvaropo aŭ iam kvinopo, ĉe 'nia' certa tablo aspektus kiel gvid-informantoj.

Iu lokala radio-raportisto eĉ intervjuis min pri la impresoj de Roterdamo. Mi volas kredi, ke mi bone komunikis al li pri kion mi devus diri

dank' al loka esperantisto. Sed ĝis nun mi ankoraŭ ne scias, kiam, kie, aŭ ĉu fakte vere disaŭdigis la raportajo.

Okazadis multaj tiuj renkontiĝoj kun konatoj kaj konotoj pere de ili, el interkiuj, bedaŭrinde, da tiuj kun japanoj estis malmulte. La salono estas tiel sufiĉe granda kaj pluraj malgrandaj seĝoj kaj tabloj, poste anstataŭotaj per kelkaj bufedoj estis tiel konvene aranĝitaj, ke oni povis ĝui komfortan etoson por konversacii unu kun aliaj dum la tuta tago ĝis la interkona vespero, kvankam pro tio mi mistrafis la programeron por, 'unuafojaj kongresanoj', kiun mi anticipe decidis nepre partopreni okaze de ĉiu ajn UK, ĉar estas por mi facile kompreneblaj ĝiaj uzataj kaj parolmaniero kaj lingvaĵo, kiuj ĉiam denove povus bonege inspiri al mi pli altan motivon pri aktiva agado por la tut-monda esperantistaro.

Antaŭ ol la komenc-horo (la 19an) de la movada foiro, mi jam iom laciĝinta ĉiam kun dorsosako, vizitante ĉe ĉiu budo en la tuta halo, mi ne plu havis energion por kolekte preni diversajn fakajn materialaĵojn interesajn ne nur por mi, sed ankaŭ por miaj konataj samideanoj en mia loĝloko hejme; mi povis apenaŭ traviziti ĝin nur po iomete da tempo. Sed ankoraŭ restis por mi bona ŝanco, t. e. tiu, kiun mi tute hazarde akiris; renkontiĝo kun s-ro Maciej Jaskot kaj, kiun mi fojfoje aŭskultas en pluraj programeroj de Radio Polonja.

Mi admiras lian belan voĉon kaj E-prononcadon. Des pli ĝoje mi povis interŝanĝi kelke da vortoj kun li kaj ankaŭ kun s-ino Gabriela Kosiarska, kvankam bedaŭrinde ne troviĝis s-ino Barbara Pietrzak ĉe la budo.

Kaj en la foiro la alia notinda afero, tamen estus pli bone dirite por mi, ĝojiga afero estis tio, ke sin trovis kaj social-demokrata kaj komunista sekcioj amike kune tenante la saman tablon tial, ke mi de antaŭlonge insistadis pri ambaŭflanka kunlaboro aŭ kunbatalo. Mi supozis poste, ke tiaj aranĝoj en esperantujo eble jam estis kutimajoj.

Mi estis sur la vojo al la amasloĝejo sufiĉe pli frue ol fermo de kongresejo pro tro da laceco. Sed la alia hazarda renkontiĝo atendis min survoje.

Tio devis esti, mi esperas, bona finiĝo de la unua kongrestago por ambaŭ, mi kaj tiu fraŭlino A, kiu tiam serĉis celatan tranoktejon, kiesejo estis ankaŭ la mia. (daŭrigota)

Epopeo "Poemo de Utnoa"

Verkita de Abel Montagut, eldonita de Pro Esperanto en Vieno 1993,
223 p. 24cm. En sep kantoj, kiuj sume ampleksas ĉirkaŭ sep mil versojn,
la aŭtoro rerakontas la historion de Noa kiel katastrofon en vastega
kosmo. Antaŭ la eksplodo de supernovao la loĝantoj de planedo Goba fuĝis
en la kosmon kaj serĉante novan koloni-planedon proksimiĝas al la tero
—— (La red.)

叙事詩「ノアの方舟の詩」の紹介

札幌エスペラント会 後藤義治

ノアの方舟といえば誰でも旧約聖書の一節にあると知っている。でも聖書をきちんと読んだ人はそう多くはない。この洪水伝説は世界中の民話に出てくるが、中でも聖書のノアの方舟が一番有名だ。聖書では創世記の6章から10章まで約250行余り、読んで見ると結構面白い。私はクリスチャンでないから、神が成した事か、ユダヤの民がシナイ半島で展開したスペクタクルかはわからない。

「ノアの方舟の詩」は7章の構成で7000行にも及ぶ大叙事詩で、しかもエスペラントの書き下ろしだ。この本は1993年にウィーンで出版され、著者はアベル・モンタギューというカタルーニャ出身のエスペランチストだ。

物語は近未来の大宇宙が舞台。なかなかファンタスティックだが判りづらい面もある。詩に出てくるウッツはノアの長男セムの孫に当たる。だが神が人間の寿命を120歳に決めた後だから、別人だろう。詩の構成は二行でビシッと決めるところもあれば、百行を越える部分もあって、今、自分はモンタギューと一緒に夢を見ているんだなあ、と思いながら読むのがコツのようだ。一冊あれば一年間充分に楽しめるのがよい。

POEMO DE UTNOA

Naŭton mi himnos kaj universe faman arkeon
kiuj elsavis vivon el tutplaneda diluvo.

Multon li trasuferis dum ĉarpentado de ŝipo,
hezitojn kaj ĉagrenojn daŭrajn fortbruste li venkis,
ĝis ondoj urbojn kovris kaj tutan teron inunde.
Homoj kaj bestoj en ŝlimfundo fordrone pereis.

Ĉiela Muzo, rakontu nun pri l'veraj eventoj
kiam elŝvelis maroj kaj la kaoso tumultis.
Ĉu ĝi fatalis nepra aŭ oni povis eviti?
Ĉu kataklismon mondan diaĝo pune provokus
Pro flama venĝdeziro kontraŭ milkrima genero?
El altoj alparolu, ĉion klarigu volonte.

* * * *

Kiam tendumis Uttu kun sia tribo nomada
en la Ŝinara lando, ĉe la Puratta rivero,
li suprengrimpis monton dum la matena krepusko.
Tie li tute solis rememorante la faktojn
praajn de sia gento, kiam subite li aŭdis,
ke jen el nordo blovas obtuza vento susura
kaj li ekvidis brilan stelon el tiu direkto,

pli brilan ol Iŝtaro, kiu ĉiele majestas.
Sed jen ĝi ekmoviĝas kaj fulmovoje rapidas
tra l'firmamento blua. Super Utnoa zenite
ĝi nun similes nubon kun mil nuancoj irizaj.
La nuboj malleviĝis kaj ŝvebis super la arboj.
Per pluvo de fajreroj, ĝi kovris ronde la zonon.

Preter l'unua miro, li nun observi kapablis,
ke ĝi aspektas kvazaŭ kupola domo fluganta,
kun muroj el arĝento aŭ lazurstono polura.
Ĝi surteriĝis antaŭ li: laŭ hufaro de bovo
impresis ĝiaj plandoj, kiuj en grundon eniĝis.
Ĉe ties ambaŭ flankoj fenestroj rondaj abudis

ノアの方舟の詩

ナウトを讃え詩いあげる、天地万物に聞こえたノアの方舟を
彼のひとは生命体を救い出した、惑星総てのノアの洪水から
果てしない苦難を背負いながら、船の本組みの最中も
限りないためらいを、落胆を、心を鋼にして勝ち抜いた
総ての大地が浸水して波が都を被い尽くす
人々も動物も泥沼の底におぼれて死に果てた

天界のミューズは今真の出来事を語る時が来た
海が膨らんだ時、カオスに群衆は騒ぎ出す
それは運命か、必然か、はたまた人類は避けうるか
この世の天変地異を、八百万の神々、罰を仕組む
燃え立つ仕置きの肉欲は、千の罪の創世か
天よ疑いを問いかけたまえ、進んで総てを明らかに

ウツツと吾が部族、一族郎党が野営した時
シアラ国はプラッタ川のほとり
早朝薄明 山によじ登る
ただ一人事の次第を思い出しながら
吾が部族の遠い祖先の声を、突然耳にする
そのとき北から鈍い風が吹いてサラサラと鳴る
風上遠く輝く星が目に見え込んだ

イシュター口を超える輝きは、天におわして荘厳なり
だが、さあ星は動き出す、雷神の道を足早に
天空を貫いて群衆に、はるかノアの頂点を
千の虹の微妙な趣き、雲にも似て、今
雲は降臨し森の上にたたずみて
花火の雨でその場に丸いドームを創る

ある驚きが掠めたが、今洞察能力が授かった
その光景はあたかも鋼がねの家が飛んでいる様子
壁は白銀か磨き上げた瑠璃色の石
その家が牡牛のヒズメを模して目の前に着地した
感銘深くヒズメの底は地盤に食い込む
回廊の両側に満月の窓がずらりと並ぶ

similaj je okuloj alrigardantaj enigme.
Li tiam vidis buntan brilon ekstere kaj ene
kiel la ĉielarko post la pluvema vetero.
Jen pordo nun ekbuŝis sur ties mezo brilanta,
ŝajne fandiĝis muro kaj aperturo magie
formiĝis. Stupareto luma elglite subiris
ĝishume, dum ĉe l'pordo sin montris iu figuro,
kies aspekto estis kiel la bildo de homo.
La lumo lin blindumis, mistera vento Zefiris
blovate de l'rondulo; pro trankviligaj efluvo
surgrunden Uttu svenis kvazaŭ li falus abismen
kaj perdis la konscion antaŭ la bildo venanta.
Samkiel blanka urso por letargio kuŝiĝas
profunde en kaverno aŭ en fendaĵo de roko,
post kiam dum aŭtuno ĝi grasnutriĝis abunde,
por povi pretervivi sub la frostego polusa;
aŭ kiel jakareo dum la Afrika kacimbo
sub koton enteriĝas, monatojn ŝirme tradormi
en viskoglua ŝlimo de sekiĝinta rivero
aŭ de multherba lago, por ne enrampi la silvojn,
simile Uttu svenis sur la herbaro de Bezer,
vidinte fajroĉaron alproksimiĝi tra nuboj.

Tiam li aŭdis voĉon, kiu en cerbo resonis:
—Ekstaru, ho Utnoa, ĉar mi parolos anonce.

Li estis Emme, ano de la popolo de Goba,
kiu tra spaco venis el sunsistemo Iboo.
Kiam eksplodis konstelacia supernovao
Nugu, ilia praa astro detrue glutiĝis
flame. Antaŭvidite de sciencistoj iliaj,
konscie, ke nenio kroma evite fareblas,
Gobanoj ekkonstruis gigantajn spackoloniojn
ĉirkaŭ la hejmplanedo kaj tiujn oni provizis
per ĉiaj materioj, rimedoj kaj per selektaj
faŭno kaj flaŭro propraj. La kolonioj egalaj

かくも左様に見ている眼にも不可解な
色とりどりの光は内にも外にも満ち満ちて
兩上がりにかかった虹のように
その輝きの中ほどに、今門が開かれる
壁が溶けるがごとく、魔法の入り口が
現れる。タラップが光を放って降りてくる
腐葉土の地面まで、同時に出口の傍にお婆が
そのお婆は絵にかいた人のよう
放つ光で目がくらみ、怪しい風が風ぎわたり
かの仲間に吹きそよぐ、音もなきグロー放電
地面にウツツは失神した、まるで大水に倒れ込むかのよう
絵のような人が来る前に意識をすべて失った
同じく白熊は昏睡状態で横たわる
洞穴深く、或いは岩の裂け目の奥に
秋が来てつかの間にも有り余る脂を溜め込んだ
極地の厳寒の下で生き抜こうと、または
アフリカのカチンボ季節のジャッカレオのように
何ヶ月もの冬眠は、泥の中に潜り込んで防備する
ヤドリ木の粘液のような干上がった川の汚泥
草ぼうぼうの泥沼に潜り込まない植物と
同じようにウツツは失神した、ベゼルの牧草地に
雲をついて近づいてくる火の車を見た後に

その時、脳に本霊する声を聞いた
—ウトノアよ立ち上がれ、私は告知して言う—

かの人はエムメだった、ゴバの民の一員で
太陽系の宇宙を抜けてやってきたイボーだ
星座の超新星がビッグバンしたとき
ヌグよ、原始の天体は破壊して飲み干した
かの科学者たちの見通しは、火だるまに
意識的に、回避を付加する道は一つもない
ゴバのメンバーは巨大な宇宙都市を作り始めた
周りに衛星をあつらえて、それらを彼らは装備した
あらゆる種類の材料で、手立ては吟味に吟味を重ね
ファヌスとフローラ特有の、そのコロニーは瓜二つ

[第1回委員会報告] Protokolo de la 1-a Komitato Kunsido

日時：2008年 9月14日（日）13:07 ~16:??

場所：北海道旅客鉄道株式会社社員研修センター

〒065-0005 札幌市東区北5条東10丁目

第72回北海道エスペラント大会でのHEL総会終了後

出席：阿部、川合、後藤、佐藤英治、椿、横山、星田（記録）

欠席：佐藤不二雄、中田、大山口

議事

*組織：HEL総会の決定による役員の役務分担

委員長：星田 淳、副委員長：阿部映子

顧問：桑原 一、児玉広夫、Sergej Anikejev（従来のまま）

事務局長：川合由香、組織部長および図書管理：佐藤英治

会計：椿 曜子、研究教育部長：椿正一 広報部長：横山裕之

委員：後藤義治（SES）、佐藤不二夫（小樽）、大山口誠（苫小牧）、

中田 実

なお委員から「機関誌部は部長1人では忙しすぎないか、横山さんに部員として協力してもらったらどうか」との意見があった。

*「おハコとぼねる」団体活動発表・紹介展 に参加

前回委員会での決定通り；9月20日（土）11時~16時

*次回委員会

11月1日 13時から 札幌エルプラザ（2階ミーティングルーム）

なお同日 10時から 市民活動サポートセンター印刷室で機関誌印刷。

[編集後記/Redaktanto parolas ...]

*UEA の Serio "Oriento-Okcidento" N-ro 44 として TRI REGNOJ（三国志）が出ました。B5版3分冊、総計1807頁。先に出た Ĉe Akvorando(水滸伝)が1830頁で15750円と JEIのカタログにあります、かなりの割引ができるので希望者は星田に連絡して下さい。~~大塚~~ 三国志の最大のスペクタクル、赤壁の戦いから今年で千八百年、これをテーマにした映画「レッド・クリフ」が11月1日に公開されるなど、マスコミ・芸能関係も「三国志について」来た感じです。この際、あの場面はエスペラントではどう表現されているかーと、読んでみませんか。

北海道エスペラント連盟 会費/年

正会員 3000円、青年会員（26歳未満） 1500円、

購読会員 2000円、家族会員 1000円